

## 黒部川扇状地における持続的農村の生活組織

田 林 明

- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| I はしがき              | III-5 余暇組織             |
| II 入善町古黒部地区の起源と同族集団 | III-6 古黒部地区における生活組織の特徴 |
| III 入善町古黒部地区の生活組織   | IV 入善町古黒部地区の経済的基盤      |
| III-1 行政・自治組織       | IV-1 土地基盤と農業活動         |
| III-2 社会組織          | IV-2 人口動態と就業構造         |
| III-3 生産組織          | V むすび                  |
| III-4 宗教組織          |                        |

## I は し が き

持続性とは一般に「継続的に努力し続けながら、たおれないように持ちこたえる能力」と定義されている<sup>1)</sup>。1960年代からの農業の機械化・化学化・合理化が進むにつれて、環境汚染などに象徴されるような、さまざまな問題が生じてきた。そこで、これまでのような生産性の追求や収入と経費を重視する農業から、環境に与える影響度を重視する農業への転換が北アメリカや西ヨーロッパなどで1980年代から提唱されるようになってきた<sup>2)</sup>。これを持続的農業 (Sustainable Agriculture) とよぶが、それは基本的には (1) 環境の質を保全したり高めたりしながら、(2) 生産者の経済的・社会的利益を確保し、(3) 十分な食糧供給を行おうとするものである<sup>3)</sup>。日本でも1980年代の後半から持続的農業の可能性が模索され始め、従来から試みられてきた有機農法やローインプット農法 (低肥料、減農薬型農法)、輪作農法などが再検討されている<sup>4)</sup>。日本では嘉田が定義しているように<sup>5)</sup>、持続的農業とは「資源の再生産と再利用を可能にし、農薬・化学肥料の投入量を必要最低限に押さえることによって、地域資源と環境を保全しつつ一定の生産力と収益性を確保し、しかもより安全な食糧生産に寄与しようとする農法の体系」とされている。

さらに1980年代終わりから、このような農業も含めた農村自体の持続性が、イギリスやアメリカ合衆国、カナダなどで問題にされるようになってきた。それでは持続的農村とはどのようなものであろうか。第1表はEverittとAnnisによるカナダのマニトバ州における研究で示された持続的農村の基準である<sup>6)</sup>。この17項目を要約すると、農村の構成員の資質、それらがつくる組織と指導者、さらに後継者の教育、社会的・経済的基盤の充実などが、重視されているといえよう。これらを参考にして、ここでは、現在および将来とも社会的・経済的に安定しており、安全で質の高い生活を享受でき、それぞれの構成員がその農村コミュニティーの一員として意義をみだし、積極的に農村を発展させようとしているような村落を、持続的農村とみなすことにする。このように考えると、村落の生活組織とコミュニケーションが十分に機能を果たしているかということが重要であり、この報告では、特に

第1表 持続的農村の指標

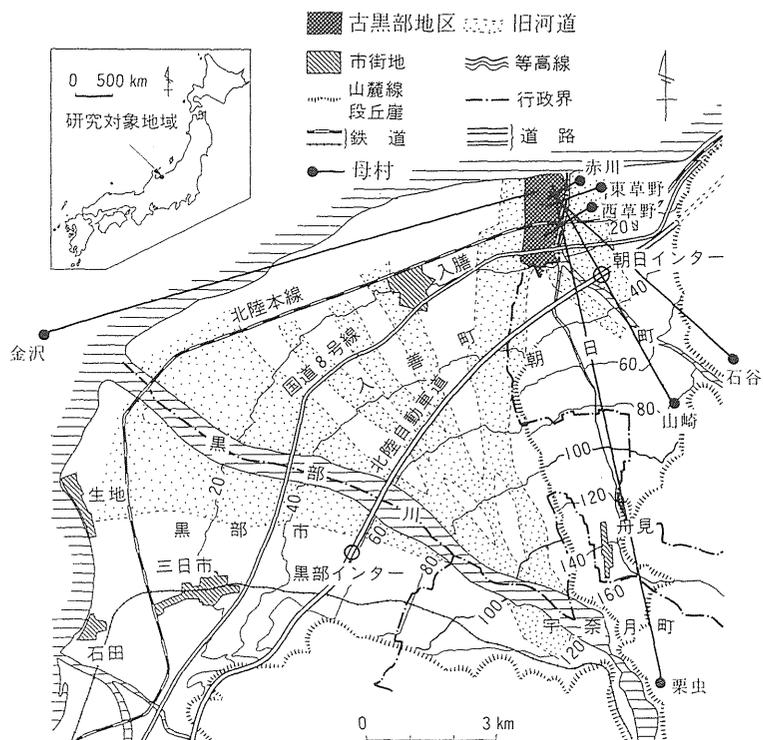
- 
- ① コミュニティーに対して誇りをもっているか。
  - ② コミュニティーの将来のために時間と知恵と資金を投下するか。
  - ③ コミュニティーに影響を及ぼす意思決定に積極的に加わるか。
  - ④ より若いリーダーに権限をわたすことができるか。
  - ⑤ 女性をリーダーとして受け入れることができるか。
  - ⑥ リーダーあるいはリーダー予定者がたくさんいるか。
  - ⑦ 教育の価値を強く信じているか。
  - ⑧ 多様な意見を導き出すような手段があるか。
  - ⑨ 情報と新しい技術を容易に手に入れることができるか。
  - ⑩ インフラストラクチャーが整備されているか。
  - ⑪ 積極的な経済的開発計画があるか。
  - ⑫ 隣接コミュニティと協力をおしまないか。
  - ⑬ 外部からのアドバイスをよろこんで受け入れるか。
  - ⑭ 若い世代が学校教育を終えた後、そのコミュニティに帰ってくることを促進するようなプログラムをもっているか。
  - ⑮ 十分な文化的活動やレクリエーション活動があるか。
  - ⑯ 自立こそが自分にとってもコミュニティにとっても最良のことであるという信念があるか。
  - ⑰ 発展のために常に新しいアイデアに関心をもっているか。
- 

Everitt, J. and Annis, R. (1992) より引用

その点に注目して、日本ではどのようなものが持続的農村と考えられ、その実態はいかなるものであるかを明かにする。事例地域として、富山県黒部川扇状地の入善町古黒部地区を取り上げる。黒部川扇状地の農村の生活組織については、すでに入善町木根地区の事例で検討したが<sup>7)</sup>、古黒部地区では日常の生活組織のなかで、様々な活動が特に活発に行われている。古黒部地区の調査結果については、すでにその概要を公表したため重複する部分もあるが、その後の補充調査の結果も加えて、ここに改めて報告する<sup>8)</sup>。

入善町古黒部地区は黒部川扇状地の北東部に位置し、東の境界は小川であり、西の境界はほぼ入川にそっている。北は日本海に面し、南は朝日町舟川新地区に接し、南北約2 km、東西約1 kmの範囲を占めている(第1図)。入善町の中心地よりも朝日町の中心地が近いので、買物はおもに後者で行う人々が多い。旧横山村の1つの大字である。

古黒部地区のほぼ中央を東西に走る主要地方道入善・朝日線(旧国道)ぞいと(写真1)、南北に走る一般地方道金山・古黒部線ぞいにはほぼ半数の家屋がかたまって立地するほかは、分散して立地している。旧国道と平行して、すぐ南にはJR北陸本線が東西にのび、古黒部地区を南北に分断している。また、南部にはこれも東西に国道8号線がのびており、近年飲食店や工場が進出してきている。水田の区画整理は済んでいるが、1912年(明治45)の小川の大洪水の後に実施された耕地整理によるものである。現在の基準からすると標準区画が8aと狭く、道路や用水路の整備状況も悪い。すでに基盤整備が行われていたために、1970年代に新しい圃場整備事業に踏み切れなかったことが、現在大きな問題となっている。



第1図 黒部川扇状地の旧河道と入善町古黒部地区の位置  
 国土地理院発行5万分の1地形図，深井三郎（1965），広川幸晴（1975）により作成



写真1 主要地方道入善・朝日線沿いの古黒部集落（1992年12月）

1990年の国勢調査によると、古黒部地区の総世帯数は117であり、総人口は469であった。1990年の農林業センサスによると、総農家数は95戸であり、そのうちの89戸は第2種兼業農家であり、大部分が恒常的勤務を行っている。115ha余りの経営耕地のほとんどが田である。家畜はまったくいない。古黒部地区では1960年以降に専業農家数が減少し、兼業化が浸透してきたが、このことは黒部川扇状地の農村に共通する傾向である。

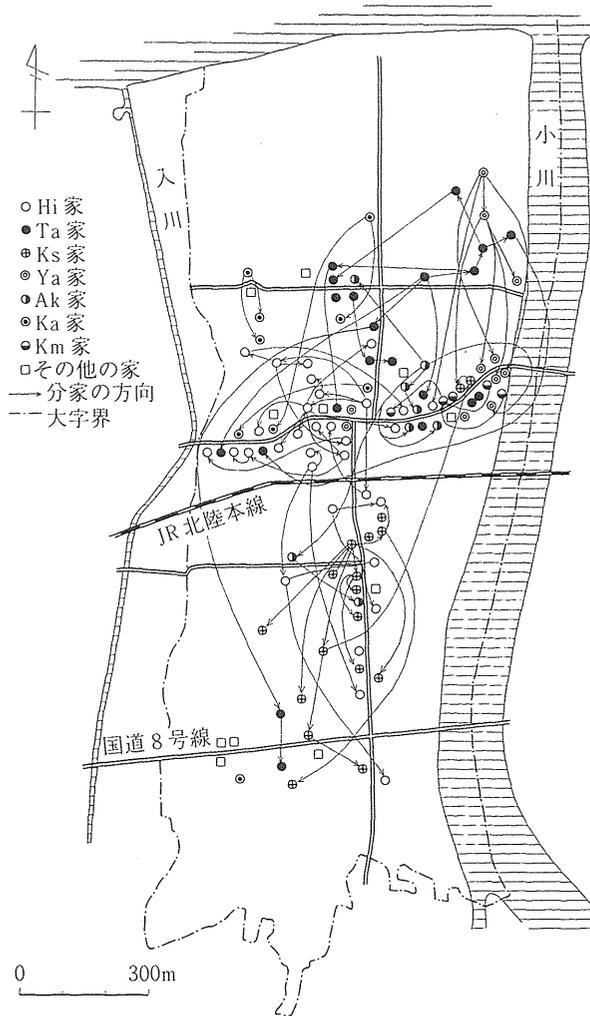
## Ⅱ 入善町古黒部地区の起源と同族集団

古黒部地区の場所にはもともと幾筋にも分れて流れていた黒部川の大きな分流の1つがあったが、これが近世の初めに締め切られ、それによって生じた荒れ地が開墾され、新しい村がつけられた<sup>9)</sup>。広川家の文書に「此村ハ先年黒辺川通 右之川あがり申跡、寛永拾五年ニ村立仕ニ付、則村名ヲ古黒辺村と申伝候」と記載されているように、1638年(寛永15)に古黒部村の村立が行われた<sup>10)</sup>。そこへ、入植した人々は、現在の朝日町や入善町、宇奈月町などからやってきた。

1990年の国勢調査の対象となった古黒部地区の117戸を苗字別にみると、Hi家が31戸で最も多く、これにTa家の20戸、Ks家の18戸、Ya家の11戸、Ak家の10戸、Ka家の9戸、そしてKm家の4戸、It家とKg家の2戸ずつが続いていた。このほかにも10の苗字があったが、いずれも1戸だけで、そのほとんどが近年転入してきた家が多い。戸数が多い7つの同族の祖先は、いずれも16世紀の終わり頃にこの地区に入植し、開拓に従事したとされている<sup>11)</sup>。Hi家は現在の朝日町の東草野地区から来たといわれ、泊地区の常光寺の檀家である。Ta家は朝日町石谷地区から、Ks家は現在の朝日町西草野地区、Ya家は朝日町山崎地区、Ak家は朝日町赤川地区から来たと伝えられており、それぞれ朝日町の南保地区の常泉寺と月山地区の光照寺、山崎地区の真浄寺、南保地区の善念寺の檀家である。またKm家は現在の宇奈月町栗虫地区から移住してきたとされる。また、Ka家は加賀藩の浪士が先祖であるといわれ、入善町上野地区の持専寺の檀家である。さらに100年ほど遅れて、現在の入善町の墓ノ木地区や青木地区から先祖が移住した家もある。いずれも、入植前の母村の地名や、入植の経緯にちなんで苗字をつけている。

1709年(宝永6)には古黒部地区の総戸数は31になり、さらに1827年(文政10)には54に増加した<sup>12)</sup>。古黒部地区の草高の変遷をみると、1656年(明暦2)にはわずか83石であったものが、1670年(寛文10)には230石になり、さらに1838年(天保9)には320石になった。17世紀から19世紀初めにかけて現在の黒部川の付近の農村で草高が減少したのに対して、この地区では急速に増加した。それでも1838年(天保9)の耕地面積は25.6haと推定され、古黒部地区の面積が飛躍的に増大したのは、明治期以降とされる<sup>13)</sup>。

主として聞き取りによって、一部既存の資料によって補充して作成したのが、第2図である。これによると同じ苗字を持つ家は、おおまかにいって空間的にまとまって分布していることがわかる。それぞれの家が入植以来同じ場所に住み続けているとは限らないが、Ya家は北東部に多くかたまっており、Ta家は北東部に本家があり北部全体に分家が広がり、Ak家は東部に、Ka家は北西部に、Hi家は中央部から一部は南部までに広がり、Ks家は南部にほぼ集中している。それぞれの場所にまず



第2図 入善町古黒部地区の同族集団と本家・分家関係（1993年8月）  
聞き取り調査により作成

草分け的な本家が入植し、周辺に拡散していったことが推測される。しかし、同族が多く分布する空間的な広がり、この地区内の地名に反映されたり、地域的単位となって現在でも機能を果たしているといったことはない。

同族のつきあいは現在では冠婚葬祭、なかでも葬式や法事の際に限られ、それも直接の本家・分家関係のある家同士の付き合いが主体である。Hi家の本家の当主からの聞き取りによると、同族を招待しての結婚披露は40年ほど以前にやったものが最後であった。1950年代まで地縁的に結びついている同族で、田植仲間をつくったり、馬を共同利用したりしたことがあった。また、洪水の際に使用する藁縄をつくる「マンモン打ち」が、1960年代前半まで、Ya家とKs家、Hi家、Ka家の本家に、周辺の住民が2月1日に集まり行われた。このような共同作業やそれにかわるものも現在ではみられない。

### Ⅲ 入善町古黒部地区の生活組織

#### Ⅲ-1 行政・自治組織

##### 1) 古黒部地区（大字）と区と班

古黒部地区は江戸期には独立した藩政村であり、明治期の町村制施行以来1つの大字としてのまとまりをもってきた。地区の人々のこの大字への帰属意識は強く、日常生活の重要な空間的なまとまりとなっている。現在ここには古黒部地区会という組織がつけられており、地区の住民の親睦がはかれるとともに、環境の整備、共同施設の維持管理などが行われている。古黒部地区（大字）の人々の活動やコミュニケーションのために重要な役割を果たしている施設としては、地区のほぼ中央に位置

する古黒部公民館とその横に設置されているゲートボール場と子供の遊び場がある。もう1つの施設は、地区の南部に位置する神明社である。

古黒部地区には行政の末端組織として機能を果たしている区が3つある。一般に黒部川扇状地の他の地区では、大字と区、さらには農業協同組合の末端組織である生産組合などが、同じ範囲に設定され、区長が生産組合長や地区の公民館長を兼ねるといった場合が多いが、ここでの区はやや異なった意味をもっている。すなわち、3つの区はそれぞれが独自の機能や役割をもつのではなく、あくまで古黒部地区（大字）の地区割という意味しかもたない。JR北陸本線の南側が3区、北側で一般地方道金山・古黒部線の東が1区、西が2区と分けられている（第3図）。

1987年に決められた古黒部地区会則によって区長は1期2年の任期となり、連続して努めることができなくなった。選挙の方法は、それぞれの家の代表者が2名連記によって投票し、まず古黒部地区全体で区長の代表、すなわち区長会長を選出する。区長会長が決められた後、区長会長が所属していない2つの区の区長をそれぞれ、全員で別々に投票して決定することになっている。被選挙人は古黒部地区の成年男女であるが、一般に50歳代の経験を積んだ人が選出される可能性が高い。1987年以前は区長を3人選出し、その後総代を6人決めてこの9人で地区の運営を行っていたが、同一人が長期間区長を努めることが普通であった。

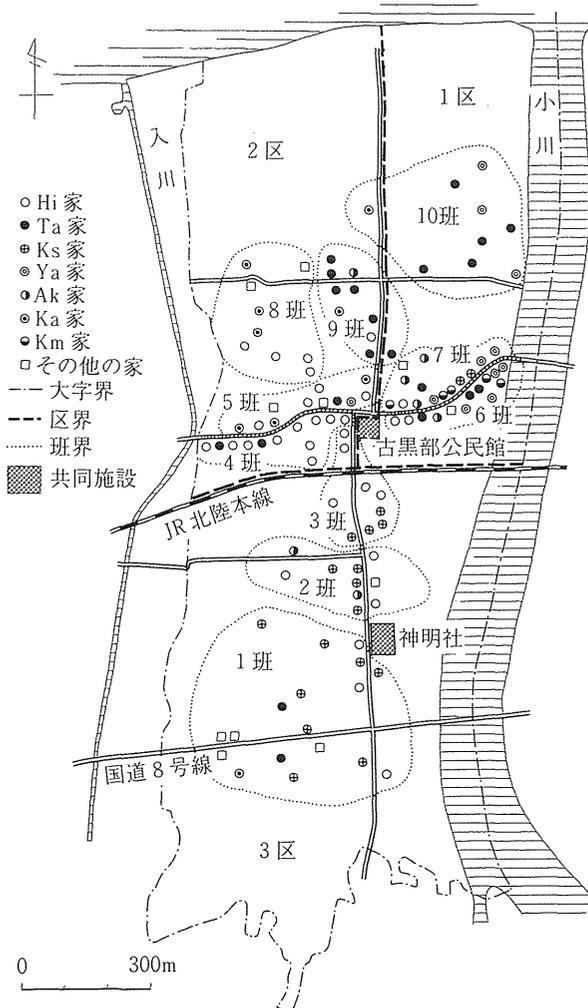
3つの区のほかに古黒部地区は、南から北へ第1班から第10班までに分かれており、第1班を除くとそれぞれの班はおおよそ10戸の家から成り立っている。第1班は国道8号線沿線を含み、近年の転入者が多く、20戸ほどになっている。班の範囲は必ずしも区の範囲におさまっているわけではなく、3班と9班と10班は2つの区にまたがっている。班長はそれぞれの班ごとに輪番制で決められるが、区長からの伝達事項を班の構成員に伝えるほか、年に5回ほど開かれる班長総代会に出席し、3人の区長とともに古黒部地区の運営にあつたっている。現在は総代という役職はないが、班長がかつての総代であるという意味でこのような会の名称をつかっている。

古黒部地区では個々の区はそれほど大きな意味をもたないまとまりであり、実質的には地区として運営され、その下部組織は班であるといえよう。

## 2) 古黒部地区の運営

古黒部地区の運営の基本方針は、1987年1月1日から施行された「古黒部地区会則」に決められている。それによると、名称は古黒部地区会とし、古黒部公民館に事務所を置くことになっている。目的としては「古黒部地区に居住する住民の親睦をはかるとともに、環境の整備、集会所の維持管理、良好な地域社会の維持及び形成に資する共同活動を行う」とされている。この会は古黒部地区に住所を有する者によって組織され、(1)自治振興、文化、教育、体育に関する事業、(2)会員相互の親睦と連絡、(3)環境衛生に関する事業、(4)祭礼、慶弔、厚生に関する事業、(5)公共諸団体との連絡協調、(6)公民館の維持管理、(7)その他会員の共同福祉に関する事業を行うとされている。そのほかに役員構成（区長会長1人、区長2人、班長10人、会計1人、監事2人）、役員の任期と選出方法、役員の役割分担、会議の仕方が詳細に決められ、文章化されている。

古黒部地区の会計年度は1月1日から12月31日までとなっているが、年に2回、1月2日と8月16



第3図 入善町古黒部地区の区と班 (1992年12月)  
聞き取り調査により作成

日に定例総会が行われ、1月には前年度の経過報告がなされ、決算報告が行われる。そして新年度の予算が審議される。また、2年に1度はこの時に、区長会長と区長、公民館長、有線放送管理者、有線放送担当者が決められる。さらに江切（農業用水路の清掃）と道路修理の際の労務賃金が決められ、これに出役しない家が支払うべき額が決められる<sup>14)</sup>。この定例総会は、普通は公民館で午前10時に始まり、午後3時頃まで議事が続く。その後2時間ほど、同じ場所で懇親会が行われ解散となる。8月16日の定例総会は上半期の経過報告を行うもので、午後1時頃から4時頃までやはり古黒部公民館で開かれ、閉会后6時頃まで懇親会が行われる。これらの定例総会には原則として地区の全ての家の代表が参加することになっており、出席率はいずれの場合もほぼ90%と高い。このほかに適宜臨時総会が行われる。1992年度の場合

は5月と8月と11月に3回臨時総会が開かれた。これは古黒部地区に進出予定のキタノ製作所との公害協定を結ぶ件や、小学校の統廃合問題、農業協同組合支庫を買取り第2公民館とするなどの課題が多くあったためである。

通常の運営は、地区の役員会である班長総代会で行われる。この会は区長と班長が構成員であり、区長会長の司会によって進められる。1992年の例によると、1月と3月、5月、6月、12月と5回行われ、その主要な議題は町道の改良推進や古黒部公民館の施設の改良や改築、江切と道路修理の日程決定、地区の賦課金の集金、消防演習の分担金の集金、有線放送の無線化、農業協同組合支庫取得の件、キタノ製作所との公害協定の件、定例総会や臨時総会の準備などであった。また、後に述べる古黒部地区で公認の各種団体の長との合同会議や、町や農業協同組合への陳情を行ったりした。

古黒部地区の運営経費は各家から徴収される賦課金によってまかなわれている。特別な事情のある

場合をのぞいて、現在は1戸当り年間13,000円の負担となっており、1月に8,000円、4月に5,000円を納めることになっている。このほかに町からの補助金や地区の共同作業に出役しなかった家から徴収した人夫賃、預金利子、寄付などの収入がある。また、臨時に余分の賦課金を徴収する場合もある。主要な支出は、事務費と地区の各種団体助成、役員手当、防犯灯管理費、会合費、陳情費、慶弔費、公募費（町の各種団体の分担金）、公民館経費、神社経費などである。1992年度の決算報告によると、収入は223万円余りで、支出は211万円余りであった。

古黒部地区では地区の住民への連絡のために有線放送が使われている。これはかつて横山農業協同組合が使っていたものであるが、農業協同組合が合併し入善町農業協同組合が成立した後、その設備を古黒部地区が譲り受けたもので、すでに30年近く使用している。各家にスピーカーが設置されている。有線放送担当者の家に放送設備が備えられており（写真2）、放送を依頼する場合は原稿を放送者に持参する。地区の公共の目的のための放送は無料であるが、個人的に依頼する場合は1回100円の手数料を支払うことになっている。年間150回くらいの個人的な放送がある。午前7時と午後7時に放送することになっている。新たな転入者の場合も、敷設費用を負担すれば加入できるようになっている。有線放送管理者は古黒部公民館長が兼任しており、公民館予算とともに有線放送経費が徴収される。1992年の負担金は1戸当り1,000円であった。

行政の末端組織として地区から伝達事項が連絡されたり、班長が各種経費を徴収する単位が班であるが、そのほかに班は葬式の際の互助組織という機能をもっている。葬儀の際には班長が中心になり世話をするが、現在では通夜と葬儀に班の構成員がおまわりはするが、手伝いにゆくのは当日だけになり、あとは親類・縁者にまかせることになっている。また、古黒部地区全体の行事の際の仕事の分担や経費の負担などは、班単位で割り当てられることが多い。例えば毎年3月から12月まで毎月第2日曜日の午前7時30分から9時の間、小川の河口から入川河口に至る海岸と古黒部公民館を清掃することになっているが、各班が1年に1度は割り当てられることになっている。また、神明社の祭礼の旗上げと清掃は、2つずつの班が組んで1年を通してやることになっている。班によっては新年宴会などを、朝日町の小川温泉や魚津市の金太郎温泉や北山温泉などで行う場合もある。班はほかには決まった行事もなく、日常の地縁的な付き合いが行われる範囲である。

### 3) 公民館

古黒部地区のさまざまな活動の場として重要な役割を果たしているのが、古黒部公民館である。この公

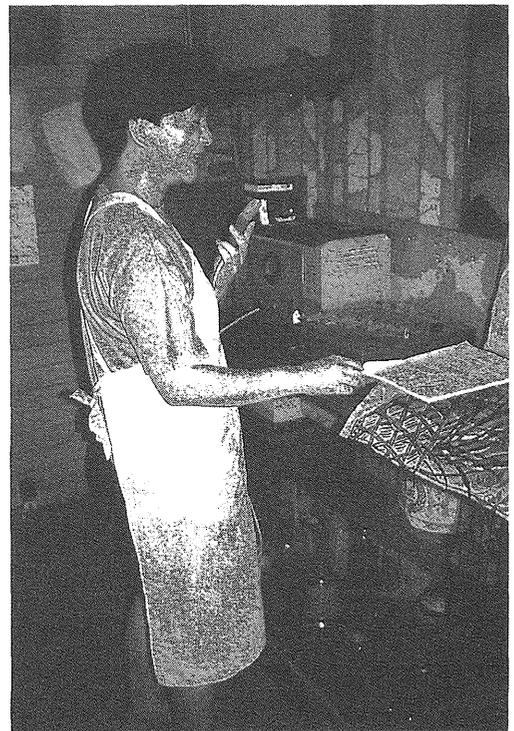


写真2 入善町古黒部地区の有線放送（1993年8月）

民館は1976年に国と町の補助金と住民の負担金、そして金融機関からの借入金によって建設された木造平屋建てのもので、建坪は60坪（198m<sup>2</sup>）である（写真3）。20坪ほどの板敷の広間の正面には床の間と仏壇が備えられ、さらに14畳の和室と台所、物置、玄関からなりたっている。この公民館は1952年に横山小学校に合併した古黒部小学校の跡地に建てられている。現在の公民館が建設される以前は、旧古黒部小学校の講堂を公民館として利用していた。

最近公民館の利用頻度が増えたために、同じ敷地内に建てられている入善町農業協同組合の支庫を古黒部地区に払い下げてもらい、多目的利用集会場（ひまわりホール）として1993年8月から利用し始めた。この支庫はもともと古黒部地区の共有地に建てられており、建物自体の原価消却も終わり、現在倉庫としても使用されていなため、古黒部地区にわずか8万円で払い下げられた。床面積は50坪（165m<sup>2</sup>）ある。新たに内装や照明施設をしたり、ももとの公民館と結ぶ渡り廊下をつくるために、約1,100万円がかかった（写真4）。1993年4月から11月まで毎月1万円ずつ合計8万円を各家から集め、残りは入善町からの補助金と一般の寄付金でまかなうことになった。この施設の完成を祝ってひまわりフェスティバルが、1993年8月1日から15日にかけて盛大に行われ、祝賀会や講演会、スポーツ大会、バーベキュー大会、物故法要（説教、茶話会）、演芸会、作品展などが行われた。また、1993年にはいってからは、古黒部地区の情報誌として1か月もしくは2か月に一度、B5版5～10ページ程度の「古黒部公民館だより」を発行することになり、地区の執行部が知りえた情報や問題点を、住民に広く早く伝達しようとしている（第4図）。また、古黒部地区から転出した家にも郵送され、故郷の現状を知らせる役割を担うようになった。

公民館の利用方法や役員については「入善町古黒部公民館規約」と「古黒部公民館の使用及び備品の使用貸付規定」に決められている。公民館の管理運営は、地区の選挙で決められた公民館長と、公民館長が委嘱する公民館主事によって行われる。原則として各月の初めまでに使用希望を公民館長に申し込むことになっているが、急な場合は事前に公民館長に電話で問い合わせ、予定がなければ利用できることになっている。また、定期的を使用するものについては申し込みの必要はない。大正琴と詩吟、健康体操のグループが定期的に使用している。公民館自体の行事や古黒部地区の行事、地区で認められた各種団体（後に述べる6つの団体がある）やグループについては使用料はいらないが、地区内の個人の使用、地区以外の団体の使用、営利を目的とするものなどについては、規定に応じて料金を徴収することになっている。鍵は公民館長と公民館に隣接した公民館主事の家で保管しており、使用者がそれを借り、使用後施設を清掃して返却することになっている。

古黒部公民館は横山地区公民館の分館として位置づけられているため、旧横山村全体の行事にも参加する。例えば横山地区公民館祭では、華の会と詩吟会がそれぞれ大正琴と詩吟を披露した。

1992年の決算書によると公民館の経費は古黒部地区からの35万円の補助金と使用料などで賄われている。有線放送も公民館の業務の1つであるが、会計は別になっている。すでに述べたように、3月から12月までの毎月第2日曜日の午前7時30分から9時にかけて、海岸清掃とともに公民館の清掃も行われている。この予定は毎年1月の班長総代会によって決められ、月毎にそれぞれの班に割り当てられる。担当の班では、班長が人員の配置を行うことになっている。



写真3 入善町古黒部公民館（1992年12月）

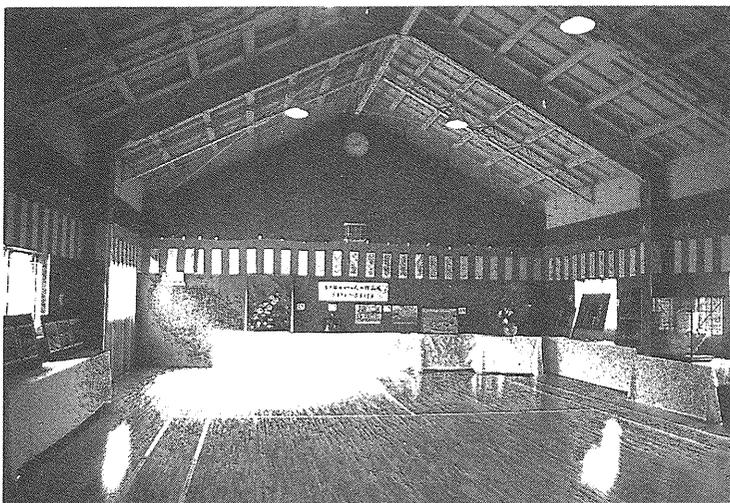


写真4 入善町古黒部地区のひまわりホール（1993年8月）

なお、古黒部公民館の敷地には、1993年に入善町から総額250万円の遊具整備の補助交付金を得て、滑り台やジャングルジム、リングトンネル、リングブランコなどが備えられ、今後バトミントンおよびビーチバレーボール用ネット、集会用テント、卓球台、キャンプ用テントが整備される予定である。

### Ⅲ－2 社会組織

古黒部地区には公に認められた6つの団体があり、この地区の予算からそれぞれ1万円の補助金を得ている。このうち体育協会と婦人会、青年団、福寿会（老人会）は入善町全体の組織の下部組織と

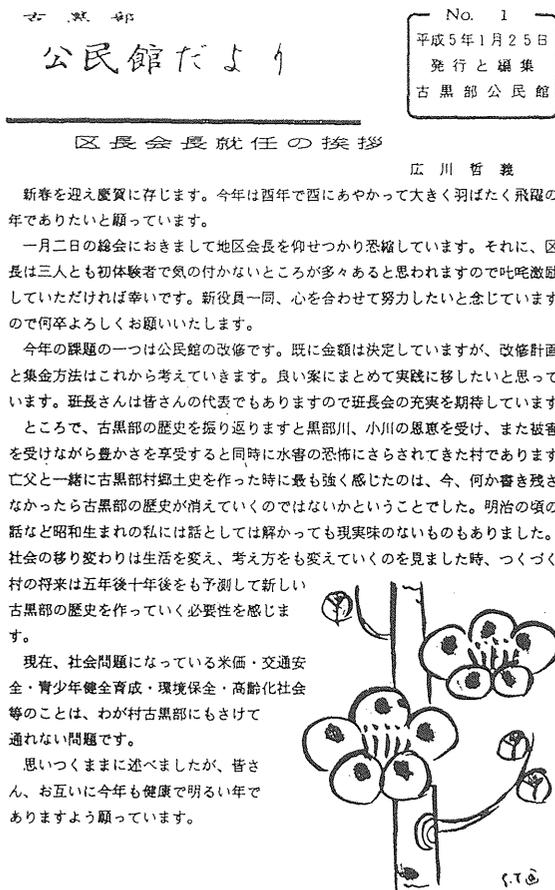
して位置づけられている。また、この地区独自のものとしては児童クラブと古青会がある。さらに、まだ正式には認知されていないが実質的に活動している黒碗会という組織もある。なお、1991年度までは若鮎会（若妻会）があったが、役員引き受け手がなく、1992年度には休止状態となっている。しかし、1993年秋には再開の動きがみられるようになった。

### 1) 体育協会

入善町体育協会は旧町村を単位とした体育協会から組織されているが、その1つである横山地区体育協会は、旧横山村に属する古黒部・春日・藤原・横山・八幡の5つの集落から構成されている。5つの集落の体育協会の会長はそれぞれ2年に1度改選されるが、そのまま横山地区体育協会の副会長になることになっている。会長は名誉職で、現在は小学校の体育の先生がなっている。横山地区体育協会には、バドミントン部とソフトボール部、バレーボール部、ビーチバレーボール部、陸上部、卓球部、ゲートボール部、ウォークベースボール部の8つが設けられており、5人の副会長はどの部かの責任者となっている。古黒部地区には10人の体育協会役員がおり、婦人会から4人、古青会から6人を出すことになっている。古青会は後に述べるように、満42歳までの男性で構成されているが、そ

の年長者グループが古青会役員と体育協会役員を分担することになっている。古黒部地区からと古青会からの助成金合計7万円で地区の運営を行っている。

横山地区全体としては6月から7月までにかけて、それぞれ部ごとに地元で大会を行い、この中で有力選手を入善町の大会に参加させる。さらに、9月下旬から10月上旬の日曜日に横山小学校で行われる横山地区運動会を行う。1992年までこれは小学校の運動会と合同でやっていたが、1993年からは別に行うようになった。古黒部独自の行事としては、児童クラブと合同で、子供のマラソン大会を11月に催している。これには小学生がおおよそ30人ほど参加する。さらに、横山地区運動会の選手を古黒部地区で選出し、その練習を行う。また、ひまわりホールの落成を記念して、1993年から古黒部地区のスポーツ大会が開かれることになった。第1回の1993年8月の大会ではビーチバレーボールと輪投げが競技種目で、3つの区の対抗戦という形で行われ、子供も含めて50人近くが参加した。



第4図 古黒部公民館だより (No.1, 1993年1月25日発行)

## 2) 婦人会

入善町婦人会には、1950年代の合併以前の9つの旧町村を単位として、下部組織がつくられているが、その1つが入善町横山地区婦人会である。これがさらに5つの支部をもち、その1つが古黒部地区の婦人会である。これは、同じような構成の入善町農業協同組合婦人部の古黒部支部も兼ねている。もともと40歳から60歳くらいまでの婦人が参加し、それ以下の年齢層は若妻会(若鮎会)に入っていたが、すでに述べたように1992年度から若妻会が解消されたために、20歳代や30歳代の若い主婦も婦人会の中で活動するようになった。1993年8月の聞き取りによると、98人の会員がいる。支部長の下にそれぞれの区ごとに1人の連絡員がおかれ、さらに各班ごとに婦人会の班長がいる。入善町全体の伝達事項のほかに古黒部地区独自の情報も、この役員組織を通じて伝えられる。

主な活動としては、入善町婦人会や横山地区婦人会の行事に参加するほか、古黒部地区独自の活動も行っている。入善町や横山地区の婦人会の行事の一環として行うものとしては、まず、毎月1日と15日に行う交通安全の立番がある。これは古黒部地区の中央の交差点で会員全員が2人ずつ輪番で立番をするものである。1人暮らしの老人への慰問品づくりは、5月下旬に横山地区全体で行い、各集落の該当者に配分することになる。これまでの例によると、眼鏡立てやタオルかけ、写真を入れる額、ひざかけなどをつくった。これには古黒部支部の役員の一部が参加する。7月の第2日曜日には、横山地区全体で約50人の75歳以上の高齢者を横山地区公民館に招待し、敬老会をおこなう。まず、ふるにはいってもらい、昼食をだし、さらに寸劇や歌、踊りなどの余興でもてなす。古黒部支部の役員14人全員が世話をする。2年に1度は11月末に、同じ形式のものを古黒部地区の高齢者だけを対象に古黒部公民館で行う。また、6月から8月中旬までは、横山地区球技大会のための選手依頼をしたり、実際に参加したり、応援したりする。種目は卓球とバドミントン、ソフトボール、バレーボール、ビーチバレーボールである。9月下旬から10月上旬の農作業が一段落した頃の日曜日には、横山地区の運動会へ参加したり、その応援をしたりする。また、横山地区を対象に年間3～4回行われる教養講座、年2回の健康講座、年2～3回の小物づくり、月1回の生け花教室などにも参加する。

また、古黒部地区独自のものとしては、年2回お盆前と正月前の公民館清掃、7月の最後の日曜日の公民館前広場の草取りを行うほか、8月第1日曜日の夜に行われる古黒部地区の夏祭に、踊りで参加する。この祭には後に述べる児童クラブや青年団、古青会、黒碗会、福寿会など地区全体が参加する。このほかに、1月下旬に新年宴会をかねて朝日町の小川温泉や宮崎、境などに日帰り旅行をする。また、5月下旬に田植えが終了すると、魚津市の北山温泉や天神山などに日帰り旅行をすることになっている。これは5年ほど前までは、1泊旅行であった。いずれにも主として40歳代以上の婦人会員だけが参加する。このほかに、農業協同組合婦人部の行事としては、自家用の野菜栽培のために、春と秋に野菜の種をまとめて購入したり、年4回ほど生活用品の共同購入の取りまとめをしたり、一日人間ドックや住民検診のとりまとめをする。年間会費として1人1,500円を集め、そのうち800円は横山地区の公民館へ、200円は農業協同組合婦人部へ納められる。残りの500円と郵便保険手数料や各種売り上げ手数料が古黒部地区での婦人会の活動資金となっている。

婦人会の主な活動の場は、古黒部公民館である。最近では婦人会の会員数が減少傾向で、その活動

も停滞気味である。婦人会は集落への帰属意識を高め、住民の生活の質の向上に大いに貢献してきた。婦人会活動が停滞するにつれて、住民相互のつながりがなくなり、地区への帰属意識が薄れること危惧する声も聞かれる。

### 3) 児童クラブ

児童クラブは1980年に古黒部地区で自主的に組織されたもので、小学生を正会員とし、幼児および中学生を準会員としている。規約によると「会員は学徒青少年としての本分を守り、遊びや勉強、共同奉仕を通して正しく明るく、世の中に役立つよう努力することを目的とする。この目的を果たすために、全体会合、学習会、見学、遠足、娯楽の会、親睦会、共同奉仕、お互いの助け合い、などの行事を行う。」とされている。

30人余りの会員があり、その父母が育成会役員として世話をしている。現在の育成会会長は、設立時以来児童クラブの指導を行い、この会を発展させてきており、1993年からは古黒部公民館長も兼ねるようになった。一年の行事としては、まず4月に子供達と集まって1年の行事の企画を立てる。子供に自主的にやらせるように指導を行う。5月にはひまわりの「花いっぱい運動」を始める。ゆくゆくは種から食用油をとって、食生活をみなおすところまでいきたいと、指導者は考えている。1993年の例では、5月末に子供達にクワと移植コテをもたせ、休耕田の一部にひまわりを移植した。別に500坪ほどの休耕田では、大人がトラクターで耕起し、ひまわりを植えた。前年の運動がたまたま読売新聞に取り上げられたことなどから、町並みフラワーライン設置事業が適用され、県と町から100万円の助成がなされた。85個のフラワーポットが道路に配置され（写真5）、7月2日にはこれを幹線道路ぞいに配置し、児童クラブが中心となりひまわりの苗を移植した。

6月にはバーベキュー大会をやる。1993年の場合午後3時頃から子供達が集まって、ひまわり畑の除草の後に、畑のわきで午後7時頃までやった。買い物や準備も子供がやることになっている。ひまわりの畑の管理は小学校の登校班ごとに5～6人ずつ5班に分けて行っている。1992年のバーベ



写真5 入善町古黒部地区のフラワーポット（1993年8月）

キューの際には、入善町と姉妹都市であるアメリカ合衆国のフォレストグローブの学生も参加し、交歓会をやったので盛大であった。このほかに、古青会のバーベキューに子供が参加することもある。

7月になって夏休みに入ると、土・日曜日とお盆の期間を除いて毎朝ラジオ体操を行う。さらにクリーン作戦と称して、婦人会や福寿会とともに、海岸や公民館の清掃を行う。また、キャンプや小川の川歩きなどを試みる。8月の第1日曜日には、古黒部地区の夏祭に「田植え唄」で参加する。これはかつて、青年団が演じたものを基にしたもので、伝統的稲作作業の最初から最後までをアレンジしてある。

9月には児童クラブとしての行事ではないが、小学生がそれぞれ家の稲刈りを手伝う。10月にはひまわりの収穫を行う。そして11月には体育協会が主催するマラソン大会に参加する。低学年と高学年に分かれて、古黒部地区を一周する。かつては大人も走っていたが、現在は小学生のみである。12月末になるとクリスマス会をやる。数年前まで古黒部公民館に集まって、ゲームをしたりプレゼント交換をしていたが、現在はこれをごく簡素にしている。最近では子供達をカラオケハウスへ連れていく方が、喜ばれる。

1月15日の午後5時頃から後に述べる祭愛好会が世話をし、差議長を行う。古黒部地区の全戸から書き初めや正月の飾りを集め、公民館のそばの広場で燃し、その後バーベキューを行う。また、2月の第2日曜日には、児童と父兄が中心となり、中学生にもよびかけて日帰りのスキーツアーに出かける。場所は、糸魚川のシーサイドバレーか拇池高原、神岡の流葉などのスキー場である。費用は参加者負担で、おおよそ3,000～4,000円程度である。3月には富山へ出かける。主目的は農村の子供に都会を経験させるということで、参加者20人ほどに大人が2～3人つきそって、富山駅で解散し自由行動をさせる。まいご対策として、古黒部地区あるいは入善市街地の特定の家を決めておき、そこへ万が一の場合電話連絡をさせることにしている。何人かのグループで行動したり、小さい子供は大きな子供に世話をしてもらうので、これまで問題がおきたことはない。

以上が児童クラブの活動であるが、現在の課題としては、父母の参加を多くすること、他県の村、例えば山村などと交流すること、他地域へ転出した人々やその子供と交流を深めることなどがある。児童クラブの指導者の基本的な考えは、本人自身の言葉を借りれば、「親の気持ちがよく伝わり、人間らしい感性を身につけてやがては社会の一員として役立てる人間になってもらいたいということであり、学歴より、お金よりも人格を高めてほしいということである。そのため、子供の時しかできないことは、精一杯かなえさせてやろう。そのために将来の後継者として子供らしく、のびのびと育つ環境をつくってやろう。時には厳しく、時には励ましてやろうと思っている。」ということである。

#### 4) 青年団

青年団には学校教育を終えて社会人になっている30歳以下の独身男性が加わる。かつては活発に活動を行っていたが、現在では団員も5・6人ほどで、積極的な活動を行っていない。従って、他の団体のように規約や事業計画もない。ただ1つ、8月13日の夜に公民館の前で行われる盆踊りを主催している。その会計報告をノートに記載して申し送っている。

## 5) 古青会

古黒部地区の青年という意味でつけられた。20歳代から42歳の厄年をむかえるまでの既婚男性が参加している。1978年頃につくられ、1993年3月現在で39人の会員がおり、古黒部地区の運営の中核的な役割を果たしている。もともと、古黒部地区から立候補する町会議員を支援するために青年層が集まったのがきっかけとなりつくられた。最初は40歳を上限としたが、7～8年経過してから会員数が減少傾向になり、42歳までにした。その会則によると、会員相互の親睦を図ることが目的とされ、そのために講演会や研究会、研修会、懇談会、親睦会をひらくことになっている。児童クラブのスキー旅行やキャンプを実質的に担ったり、体育協会が世話をする運動会に参加する主力メンバーが、古青会の会員である。

年間行事を具体的にみると、まず、4月の第2日曜日頃に総会をひらき、事業計画と予算案を提案し、それに基づいて年間の活動を定める。5～6月にかけては児童クラブの30人余りの小学生のために、清水川の河口をせき止めてニジマス釣りや海岸でバーベキュー大会を行う。それとは別に会員が墓ノ木自然公園でバーベキューをやったりする。8月の第1日曜日に行う夏祭を主体的に運営する。公民館に仮設舞台をつくり、そこで婦人会や児童クラブなどと協力して余興をやったり、公民館の広場に7～8軒の屋台をだし、氷水や焼き鳥、焼きそば、田楽、飲み物、ようようなどを売ったり、がらくた市を開いたり、金魚すくいをやったりする。例年10月末から11月初旬には一泊の研修旅行にでかける。12月下旬から3月上旬まで分担を決めて、町から借り受けたブルトーザーをつかって、古黒部地区内の町道の除雪を引き受ける。2月にはボーリング大会を行い、3月20日頃に区長会が中心となって、午前中は江浚い、午後は道路普請が行われるが、この仕事の後古青会の総会が開かれ、事業と決算の報告がなされる。満42歳の厄年を迎えると、神明社の元始祭でお払いをうけ、この会を終えることになっている。

最近古青会の活動がやや不活発になってきた兆候がみられ、それを後に述べる黒碗会が補うような状況になってきている。会員の絶対数の減少とともに、会員相互の連帯感が薄れる傾向がみられる。また、これには若妻会が休止状態であることが、大きく影響している。もともと若妻会の会員は、35歳以下の既婚女性であり、多くは古青会の会員の妻であり、両者が協力して活発に活動していた。古黒部地区の活力を失わないためにも、若妻会を復活させることが必要で、古黒部公民館長らが世話をし、1994年春には再発足する方向で準備が進められている。

## 6) 福寿会

福寿会は会則によると60歳以上の男女が参加し、1993年3月現在で76人の会員がいる。この会則は入善町福寿会の会則に準拠している。互選で選ばれた会長は男性であるが、さまざまな行事の参加者はほとんどが女性である。古黒部地区のそれぞれの班から1人ずつ合計10人の理事が選出されており、これらもすべてが女性である。入善町福寿会主催の史跡めぐりや、横山地区福寿会の高齢者学級や横山地区公民館（漁村センター）の清掃、ゲートボール大会、教養講座などの行事のほかに、古黒部地区独自の行事が多く設けられている。それらは以下の通りである。

1月10日には新年宴会が公民館で開かれ、午前10時から午後3時頃まで昼食をはさんで親睦会が開

かれる。30人から40人が参加するが、男性は1人か2人で、残りは女性である。会費として参加者から1,500円程度が徴収される。さらに年間5～6回法話会がひらかれる。古黒部地区の家が檀家になっているいずれかの寺の住職に来てもらい、お教をあげてもらい、説教をしてもう。普通午前10時頃に始まり午後2時頃に終わる。場所は公民館で、弁当を持参したり、当日会員でつくったりする。3月下旬には総会が開かれ、役員が決められたり、決算や予算の審議が行われる。年に2回5月中旬と10月下旬には日帰りもしくは一泊で旅行にでかける。魚津の金太郎温泉や生地の田中鉱泉、朝日町の小川温泉など近まわりが多い。そのほかにゲートボールなどのスポーツ、花見、海岸やゲートボール場の清掃、講演会、夏祭などが行われ、12月上旬には針供養として忘年会が開かれる。

会費は年間1,500円である。会員が死亡すると会長が弔辞を読み上げることになっている。葬式はすでに述べたように、関係の班が世話をすることになっているが、古黒部地区のすべての家が香典2,000円をそれぞれ持参し、おまいりすることになっている。福寿会では4年に1度はその間に死亡した会員の法要を合同で行うことになっており、これには親類縁者も含めて、60～70人くらいの参加者がいる。

#### 7) 黒碗会

古青会を終えた満42歳から60歳までの男性が参加する会であり、1990年12月に結成された。昭和20年代まで30歳代から40歳代初めくらいの男性が集まって、黒い碗で酒を酌み交わし、世の中を論じていたとされるが、このことにちなんで名付けられた。厄年を迎え古青会を終えると、地区の中で集まる機会がなくなり、寂しい思いをすることからつくられた。まだ結成されてから日が浅いために古黒部地区の団体として認知はされているが、正式には認められていない。しかし、古黒部地区を主体的に支え・運営する年齢層が38人も参加しているため、しだいに重要性が増してきている。1993年1月の地区の役員改正でも、3人の区長のうち2人はこの会の会員であった。現在のところ会としての強い主張をしないうで、都合のつく人が集まって懇親会をやりながら、古黒部地区が直面する諸問題や将来を考えようとする姿勢をとっている。会則によると、会員相互の親睦と古青会の後援、ならびに古黒部地区の活性化を図る目的をもっており、そのために7月と12月に親睦会の開催、夏祭の後援活動、その他とされている。年会費は1,000円で、その他活動時に適宜会費を集めている。奈良・京都など少し遠方への旅行も行っている。また、桜の木を50本小川の堤防に植えたりした。また、古青会がかつてほど勢いがなかったので、1993年の夏祭では屋台をだすなど、積極的に活動を始めている。そろそろ古黒部地区の公認団体にしてもらい、責任のある役割を果たそうという動きもある。

#### 8) 祭愛好会

最近つくられた会で、祭を盛りあげることによって村おこしをしようとする目的をもっている。4月3・4日と10月15・16日の神明社の祭の際に子供御輿をだし、子供たちをつれて夜にタイコと笛をならしながら古黒部地区をまわることにした。また、1990年には神明社の紋がはいった旗を各家で購入してもらい、1991年には紅白の幕を買ってもらって、祭当日あげてもらうことにした。

### Ⅲ－3 生産組織

#### 1) 生産組合

古黒部地区の生産組織としては、農業協同組合の下部組織としての生産組合をまずあげることができよう。生産組合はJR線北陸本線を境に北の古黒部北部生産組合と古黒部南部生産組合がつくられている。南北の生産組合にはそれぞれ5つずつの班がつくられており、一般に増産班と呼ばれている。構成員は当然ながら農家だけである。その範囲は、すでに述べた古黒部地区の班と基本的に類似しているが、細かい点で異なっているところもある。それぞれの班に班長がおかれ、町や農業協同組合からの営農に関する連絡事項を伝達する。営農組合の主要な活動としては、新年宴会と農事座談会、青田まわり、田植終了後の慰安旅行、農業資材購入の取りつぎ、転作や農業共済に関する連絡事項の伝達などがある。

このうち農事座談会は1年に4回行われ、3月下旬には前年の稲作の反省とその年の基本方針について、5月下旬には稲作管理について、8月上旬には産米改良座談会、10月中旬は翌年の肥料設計という内容である。おおよそ50%くらいの農家が参加する。また、青田まわりは7月上旬と中旬の2回にわたって、農業協同組合や農業改良普及所の指導員とともに水田をまわり、稲の生育具合について検討することになっている。7月初旬は早生の越の華、7月中旬はコシヒカリを対象とする。約80%の農家がこれには参加する。また、田植えが終了した5月中旬の日曜日には日帰り、南北の生産組合が合同で、農休みの懇親会が近くの温泉などで行われる。

すでに述べたように古黒部地区の農家は、ほとんどが兼業農家であり、稲作を除くとみるべき農業経営部門もないので、それらについての組織はみられない。一般に他の地区では地区全体で集団転作を試みて通常よりも多くの転作奨励金を得ているが、この地区では個々の圃場が小さいということもあって、農民が個別に転作をしている。

#### 2) 古黒部土地改良区

黒部川扇状地の他地域では一般に旧町村の範囲や幹線水路の灌漑範囲に対応して土地改良区が設けられているが、古黒部地区では独自に土地改良区を組織して、用排水路や農道を維持管理している。この土地改良区は1963年に設立されたもので、受益面積が115ha、組合員が103人の小規模なものである。土地改良区の賦課金は10a当り600円であり、他の地区が2,000円から3,000円の賦課金を徴収していることと比較すると格段に安い。しかし、その分施設の維持管理に個々の農家の労力が多く必要である。土地改良区が主体となって3月下旬には江切り（江浚い）が、地区の道路清掃とともに行われる。

設立以来、通常の維持管理とともに、用排水路の改修や畦畔のコンクリート化、小用水路の三方コンクリート化工事、主要農道の拡幅などを実施したが、1970年代に黒部川扇状地のほぼ全域で実施された圃場整備は一部の人々の強い反対で実施することができなかった。このことが、この地域の現在の営農面に関する大きな問題を生じさせたと考えられる若い世代が多い。8aといった狭い標準区画の水田がさらにいくつにも分割され、耕作地も分散している現状では、機械化による農業の合理化・省力化が困難であり、さらに兼業農家が農作業を委託しようとしても、引き受け手のない状況になってき

ている。したがって、現状ではそれぞれの農家が農外就業の合間に農作業を続けざるをえないが、早晩作付放棄地が急増すると懸念する声も聞かれる。

### Ⅲ－４ 宗教組織

#### １）神明社と祭礼

すでに述べたように、古黒部地区の中樞施設の１つとして神明社がある（写真６）。この神社は天照大御神を祀ったもので、古黒部地区によって運営され、現在地区の予算から20万円が神社経費にあてられている。1992年には前年の台風によって神社の境内の樹木が倒れ、その倒木の処理と社の修理のために78万円の臨時出費があり、その分を特別会計として各家から7,000円ずつ徴収した。古黒部地区の112戸が氏子となっており、実際の運営は3つの区からそれぞれ2人ずつ選出される宮総代によって行われる。宮総代のうち1人は会長で残りの5人が年間5回行われる祭礼をそれぞれ分担する。神社の祭礼には、鳥居の横に祭礼旗をあげることになっているが、例えば今年は1・2班、来年は3・4班といったように古黒部地区の2つずつの班が輪番に、これを年間を通して担当することになっている。この2つの班が神社の清掃も行う。神社の主要行事は以下の通りである。

**元始祭** 1月6日は元始祭であり、正月のお払いと42歳と61歳の厄年の男性がお払いをうける。しめ縄とかざりの寄付はこの厄年の人がする。古黒部地区のすべての家からお払い米として1合ずつ班長が集める。当番の宮総代が神社予算から酒の肴を用意して、午後2時頃から6時頃までに、行事と簡単な懇親会を行う。元始祭の総予算は20,200円と決っている。おおよそ30人から40人が参加する。

**春祭** 4月中旬には春祭が行われる。この予算は25,200円である。この場合も各家が1合の米を寄付する。すでに述べたようにこの時に子供御輿がでる。参加者は20人から30人である。

**虫祭** 現在は虫祭とよぶが、これは他地区の虫送りになったものであり、この地区では本来は川祭であった。この場合も各家から米1合を集め、20,200円の予算で祭を行う。参加者は25人前後であ



写真6 入善町古黒部地区の神明社（1992年12月）

る。この祭の後、8月中旬には当番の2つの班が神社と境内の除草と清掃を行う。この際の手当は11,000円と決められている。

**秋祭** 10月15日は秋祭である。この場合も各家が1合の米を寄付し、地区からは25,200円の経費が出される。祭礼は午後2時頃から6時頃までであるが、夕方には子供御輿がでる。祭愛好会が主体になって、車に御輿をのせて古黒部地区を巡回し、宮総代と区長、その他の団体の長のところで、祝儀をもらう。御輿は6年程前につくられたものである。秋祭には30人から40人が参加する。

**新嘗祭** 11月上旬に新嘗祭が行われる。これは新穀祭ともいわれ、収穫を祝う祭で、この時は各家から1升ずつ米を集める。非農家は1升分の現金を出すことになっている。参加者は20人から30人である。

## 2) その他の宗教組織

寺院関係はすでに同族のところで触れたように、基本的には苗字を同じくする家がそれぞれ別の寺の檀家となっている。すべて浄土真宗であり、寺ごとに報恩講などの行事がある。このほか古黒部地区が主体となる宗教的な行事としては、講と御影様と本山御助成などがある。

**講** 毎月1回14日前後にHi家の同族を除く古黒部地区の70～80戸の家が輪番で世話をし、古黒部公民館に入善町上野の持専寺の住職を招いて、お教をあげてもらい、説教をしてもらう会である。1977年頃まで当番の家で行っていたが、その後公民館でやるようになった。当番の家の近辺の20～30人の高齢者が参加する。もともと、隣近所の親睦をはかるために始められたものとされる。参加者の輪番制であるので数年に1度当番になるが、その際には8,000円の住職への謝礼と茶菓代を負担することになる。Hi家の同族もかつては独自でやっていたが、消滅してしまったとされる。

**御影様** 浄土真宗大谷派では乗如上人の絵像を、本願寺派では明如上人の御影を巡回する。この御影様は各地区で迎えられ、お座が催される<sup>15)</sup>。古黒部地区には、乗如上人の御影様が巡回してくるになっている。大谷派では富山県内を13の組に分けており、黒部川から東の地区は第十三組に属し、さらにそれが東・中・西組に細分されており、古黒部地区は西組に属する。巡回の仕方は隔年ごとに異なっており、1993年の場合には、小川をはさんで対岸の朝日町赤川地区から入善町の春日地区、藤原地区を経て、7月1日の午後4時30分頃に御影様（絵像2巻とお花立て、線香立て、ろうそく立て、鐘のセット）が古黒部公民館に到着した。軽トラックで藤原地区まで迎えに行き、当日夕方お勤めし、さらに翌朝午前8時30分から1時間ほどお勤めすると、荒又地区から迎えが来た。1994年になると、7月2日の午前9時30分頃赤川地区へ迎えにゆき、午後1時頃まで公民館でお勤めをし、午後2時30分頃に藤原地区から迎えが来るようになっている。お勤めに参加するのは40～45人ほどで、大部分が50歳以上の女性である。

**本山御助成** 毎年3月10日頃までに本山御助成の連絡があるので、2月中に古黒部地区の112戸からそれぞれ400円ずつを班を通じて徴収してもらい、3月3日頃に公民館で御助成会をやる。そして、徴収した中からおおよそ15,000円を横山の専徳寺や上野の持専寺といった、その年の当番の寺に持参することになる。また、東本願寺の富山別院から春と秋の彼岸法要をはじめ年間5～6回の寄付依頼があるので、上記の残金を使って2～3回程度出すことにしている。それぞれの家から徴収できる金

額も限られているので、これからは出せるかどうかはあやしくなってきた。

### Ⅲ－５ 余暇組織

古黒部地区ではここ10年の間に女性を中心に、新しい余暇組織がつくられた。いずれも、古黒部公民館を中心に活動を続けている。

#### 1) 吟詠会（詩吟）

朝日町泊地区から指導者を招いて、月2～3回木曜日の夜に古黒部公民館で、1時間半から2時間練習する。6月から10月までは午後8時から、それ以外は午後7時30分から始める。1984年頃から始まったが、もともとは十数人が参加していたが、現在は60歳代前半が3人、50歳代後半が3人の6人で続けている。いずれも女性である。

#### 2) 華の会（大正琴）

1989年に始まった会で、毎週火曜日の午後8時から10時まで2時間古黒部公民館で、指導者を招いて大正琴を練習する。ただし、農繁期の5月と9月は練習を休むことにしている。40歳代の主婦が主体で、14人の会員がいる。富山県の大会と入善町の大会が、2年に1度ずつ交互に開かれるので、それに参加する。また、毎年11月中旬には旧横山村の各集落があつまって横山地区公民館祭りが開かれるので、それにも参加して発表する。月に会費として1人2,000円を徴収し、指導者の謝礼や会食の費用に使用する。

#### 3) 健康体操の会

この体操は健康維持のために2人組で行うもので、おおよそ10年ほど前から始まった。主として体を引っ張って伸ばす動作が多い。50歳代後半から60歳代前半くらいまでの農家の主婦や勤めを退職した婦人が12人参加している。当初は20人余り参加していた。もともと、営農指導員から教わったもので、現在では週2回、1回は月曜日の夜に古黒部公民館で、もう1回は公民館が使える日に行っている。10月から3月までの農閑期には午後7時30分から9時まで、残りの時期には午後8時から9時30分まで体操をする。会費は徴収していない。定期的にこのような会を行うようになったのは、児童クラブの指導者が活発に活動しているのに、刺激されたためである。

#### 4) ビーチバレーボールクラブ

現在20歳代半ばから30歳代後半までの若い主婦9人が参加している。1993年6月に活動を始めたばかりである。いずれも乳幼児をもっており、家事から時には離れて気分を発散させることや、相互に育児や家事などさまざまな話題について意見を交換する場を求めたことがグループ結成の1つのきっかけとなった。1992年度まで存在していた若妻会が、解散状態にあることも、もう1つの要因となった。毎週木曜日の午後8時から約1時間練習を行う。1993年7月までは横山小学校体育館で練習を行っていたが、8月からは新しくできたひまわりホールでやることになった。1993年8月上旬の聞き取りによると、まだ会費も決めていない状況であった。

### Ⅲ－6 古黒部地区における生活組織の特徴

これまで、古黒部地区の主要な生活組織を検討したが、行政組織としての区と公民館、体育協会、児童クラブ、婦人会、古青会、黒碗会などが30歳代終わりから50歳代までの指導者を中心に活発に活動している。しかし、神社や仏教の行事の不振や若い独身男性の青年団の活動の低調さ、若い既婚女性の若妻会の解散などがある一方、女性を中心としたレクリエーションの活発化など、他の地区と共通する面も多い。しかし、なかでも特徴的なことは、古黒部地区会と各種団体は、青年団を除いて、規約をもち、予算や決算、事業計画をもち、きちんと運営されていることである。他の地区では多かれ少なかれ慣習に基づいて適宜運営されることが多いのに対して、古黒部地区ではこれらのことが明確に文章で規定され、それにもとづいて処理されている。また、それぞれの団体、特に地区の公認団体は相互に連携をとりながら運営されている。そして住民が地区のことにきわめて高い関心をもって、運営に参画しており、公民館だよりや有線放送など、広報手段も整備されている。

古黒部地区の住民は自分が生まれ育ち、現在居住している地区に愛着をもち、誇りをもち、さらにその自然的・文化的環境を維持・向上させ、次の世代を育てるために労力と資金と知恵をだすことを惜しんでいないようにみうけられる。このようにしてみると、住民やリーダーの属性という点では、すでに第1表に示したカナダの持続的農村の指標にもかなう面が多い。若い後継リーダーの不足や女性の活躍という面ではやや問題があるかもしれないが、それでも農村の生活組織という面では十分に持続的品格をもってると判断することができる。しかし、インフラストラクチャーの整備や将来の経済的計画など、黒部川扇状地の他の農村と比較しても遅れをとっているといわざるを得ない面もこの地区には多くみられる。そこで、これらの点についてもう少し考察することにしよう。

## Ⅳ 入善町古黒部地区の経済的基盤

### Ⅳ－1 土地基盤と農業活動

#### 1) 小川の洪水と耕地整理事業

すでに述べたように古黒部地区の水田の区画整理は一応行われているが、1912年（明治45）7月22日の小川の大洪水によって流失した水田の復旧工事として実施されたものである。この当時の洪水の様子は入善町役場税務課が保存している「古黒部南部耕地整理組合地区及之ニ隣接スル土地ノ現況図」や「古黒部郷土史」に断片的に示されているが<sup>15)</sup>、小川に舟川が合流する地点からおおよそ200mほど下流の堤防が午前9時頃に315mにわたって破壊された。小川の水が一挙に古黒部地区の水田を押し流し、一時的に鉄道線路でせき止められ、2.4m以上の深さにまで滞留したが、その後鉄道路線も崩壊し、その下流の水田や住宅も大きな被害をうけた。これによって、古黒部地区の大部分の水田で、稲作ができなくなってしまった。

そこで、当時の大地主のHi氏とTa氏がそれぞれ中心となって、現在の主要地方道入善・朝日線を境に、南の範囲で南部耕地整理組合を北の範囲で北部耕地整理組合を組織することになった。Ta家に残る文書では、同年9月26日に南北両組合を当時の国道を境に設立すること、組合の規約は南北同様のものをつくること、用排水路は国道以北（下流）は以南（上流）のものに従うこと、組合役員は

両組合が協議して選出すること、さらに実地測量は国道以南から始めることを決めている。南部耕地整理組合の現況図は1912年の11月10日から1か月かかって測量され、翌年11月に製図が完了していることから、工事は1913年（大正2）から開始されたものと考えられる。資料がなくその後の経過は不明であるが、換地も含めて完了したのが、北部耕地整理組合の場合が1933年（昭和8）であり、南部耕地整理組合はHi氏の経済的状況の悪化もあって、ようやく1949年（昭和24）年であった<sup>16)</sup>。

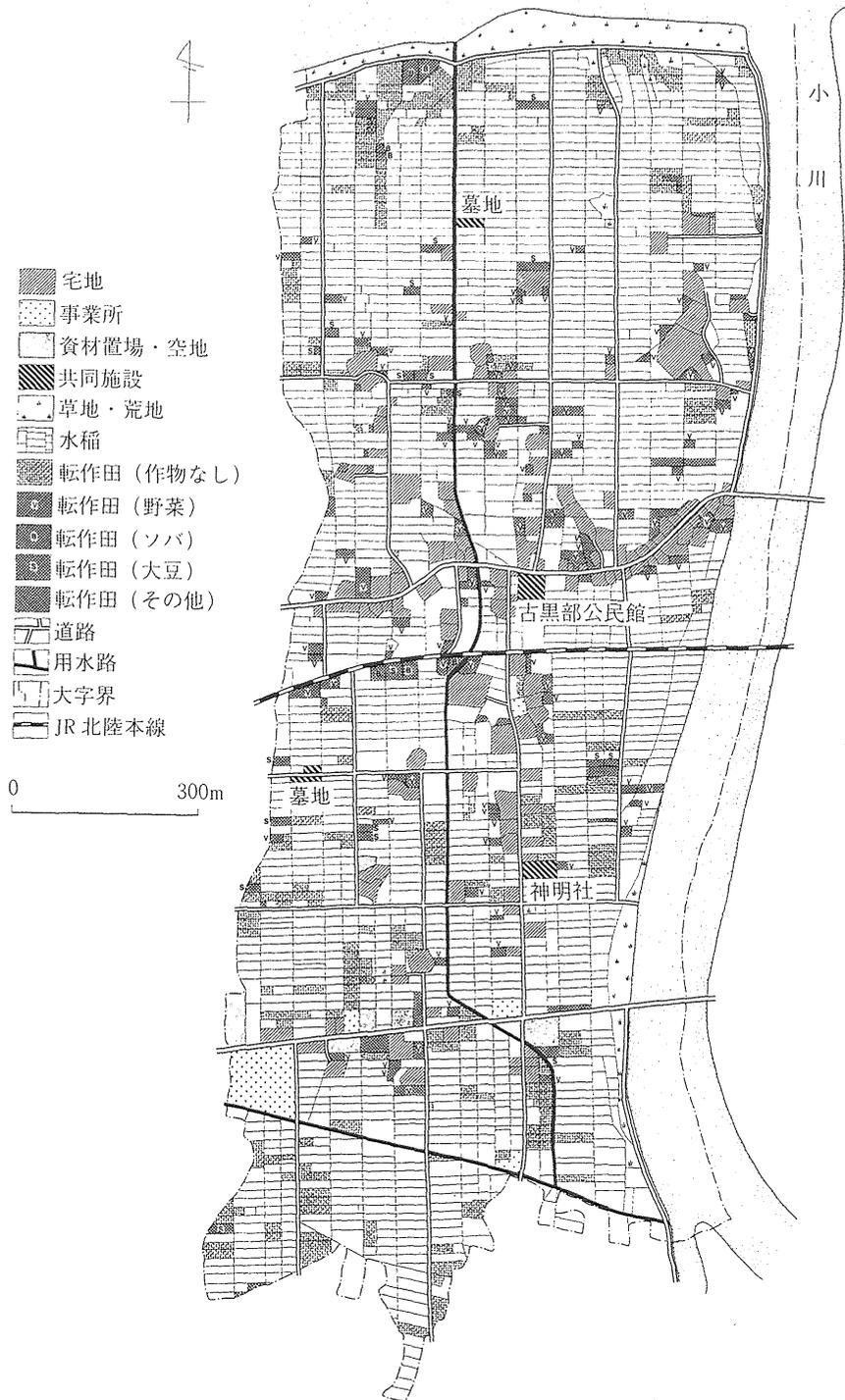
整理後の一枚の圃場は、南北方向の短辺が14.6m（8間）、東西方向の長辺が54.6m（30間）の約8a（240歩）であり、完成当時としては、他の地域と比較すれば、水利条件や耕作の便は極めて良かった。しかし、換地の際に多くの問題を残したとされ、これが1970年代の圃場整備の実施に反対者がでた大きな原因となった。当時は今日と異なって、区画整理後の農地の再配分においては、元の所有地を重視したようで、農地の集団化による効率化は十分にはかることができなかった。したがって、現在でも古黒部地区ではそれぞれの農家の耕作地の分散の程度は著しく、さらに8a区画の水田を2人や3人に分割しているいわゆる「仲間田」も多い。このように、土地基盤の整備は遅れている。

## 2) 農業的土地利用

第5図は1993年8月に実施した土地利用調査によるものである。その後の細かい土地改良事業によって用水路の部分的整備、一部の畦のコンクリート化、農道の拡幅が進められているが、それでも水田の畦を徒歩でわたらないと到達できない水田が相当みられた。このような水田には、耕耘機やトラクター、田植機などは、他の水田を通過しないと入れないことになる。聞き取りによると、他人の水田を通過しなければならないことも多い。さらに、麦類や球根などを転作作物として植えた跡とみられる、作物がみられない水田が多く分散して分布していた（写真7）。また、かなりの水田が、自家用の野菜畑に転換されていた。このような、野菜を栽培する水田もまとまっているわけではなく分散していたが、比較的宅地に近い場所に立地していた。転作田にソバや大豆を植えている場合もあったが、その大部分はいわゆる荒し作りで、生産目的とは考えにくい例も少なくなかった。転作田は特



写真7 入善町古黒部地区における水田の転作状況（1993年8月）



第5図 入善町古黒部地区の土地利用（1993年8月）  
 国土地理院撮影空中写真および1993年8月23・24日の現地調査により作成

第2表 入善町古黒部地区における作物別の水田転作面積（1993年）

単位：a（％）

	麦類	雑穀	豆類	緑肥	球根	果樹	野菜	花卉等	飼料	その他	合計
古黒部地区	207 (12.4)	476 (28.6)	45 (2.7)	438 (26.3)	86 (5.2)	20 (1.2)	380 (22.9)	11 (0.7)	0 (0)	0 (0)	1,663 (100.0)
入善町	13,505 (25.1)	1,436 (2.7)	14,348 (26.7)	6,481 (12.1)	5,678 (10.6)	64 (0.1)	5,285 (9.8)	478 (0.9)	6,468 (12.0)	27 (0)	53,770 (100.0)

入善町農政課資料により作成

定の場所に集中しているわけではないが、相対的にJR北陸本線よりも南に多く、北部では海岸に近い部分にかたまっている。

第2表は古黒部地区における1993年度の水田の転作状況を示したものである。全体で1,663aが転作されたが、その中で最も面積が広いものは、雑穀の476aであり、これは古黒部地区の場合すべてがソバである。これに次ぐのはレンゲを主体とした緑肥作物（地力増進作物）の438aと、野菜の380aである。麦類は207aにすぎない。入善町全体と比較すると、雑穀と緑肥と野菜の割合が特に多く、逆に麦類と豆類と球根が少ない。こうしてみると、古黒部地区では自家用の野菜を除いて、転作田の利用は粗放的で、時には荒し作りのような場合が多く、そこからまとまった収入を得ようという姿勢は少ないと考えられる。古黒部地区の北部では南部と比較すると、麦類と大豆が相対的に多く、ソバとレンゲが少なく、入善町の平均に近い。古黒部地区では農業的基盤が未整備なこともあって、転作には力が入っていない。ちなみに他の地区では集落ぐるみの取り組みによって転作田を集団化し、10a当たり30,000円以上の奨励金をえているにもかかわらず、古黒部地区では個人個人が転作に取り組むため、一般作物で10a当たり7,000円、野菜類で4,000円の奨励金を得ているにすぎない。

### 3) 農業経営

1990年の農林業センサスによると、古黒部地区には95戸の農家があり、その内の4戸が専業農家であり、第1種兼業農家が2戸にすぎず、大部分は第2種兼業農家であった（第3表）。第2種兼業農家率は93.7%であり、入善町全体よりも5%ほど高い。4戸の専業農家の大部分は老人世帯であったとみなされる。ちなみに、1993年8月の聞き取りによると、3戸が農業のみに従事していたが、その内の2戸は退職公務員で、残りは老人の1人暮らしであった。経営耕地面積については、10aの果樹園を除けば、残りの11,540aは水田である。これに対して、稲と麦類、雑穀、大豆、野菜、その他の栽培面積がそれぞれ8,860aと1,134a、147a、570a、197a、66aであるので、全体で11,547aにすぎず、土地利用率は95.8%にすぎない。入善町全体の土地利用率は100.7%であるため、転作状況とともに、これからも古黒部地区の粗放的土地利用の傾向を理解することができる。

ところで、同じ農林業センサスの資料によって農産物の販売規模別農家の割合を入善町全体と比較してみると（第4表）、古黒部地区では100～500万円までの販売額の農家が全体の70%近くを占め、基本的には町全体と類似の傾向がみられる。しかし、古黒部地区ではこの範囲よりも少ない販売額の農

第3表 入善町古黒部地区における農家と経営耕地

年	農 家 (戸)				兼業別農家 (戸)			経 営 耕 地 (10a)			
	合計	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家	恒常的勤務	日雇臨時雇	自営	合計	田	畑	果樹園
1960	103	16	67	20	76		11	1,097	1,096	0	1
1970	99	13	47	49	99		7	1,133	1,129	4	0
1975	97	5	37	55	49	41	2	1,169	1,169	0	0
1980	97	4	24	79	53	36	4	1,213	1,213	0	0
1985	94	3	3	88	61	19	3	1,135	1,128	7	0
1990	95	4	2	89	84	2	5	1,154	1,153	0	1

農業センサスにより作成

第4表 入善町古黒部における農業経営の規模と労働力 (1990年)

## a) 販売規模別農家数

単位：戸 (%)

	販売なし	～50	50～100	100～200	200～300	300～500	500～700	700万円～	合計
古黒部地区	1 (1.1)	12 (12.6)	13 (13.7)	30 (31.6)	21 (22.1)	15 (15.8)	3 (3.2)	0 (0)	95 (100.0)
入 善 町	97 (3.1)	426 (13.5)	557 (17.6)	1,024 (32.4)	566 (17.9)	361 (11.4)	69 (2.2)	62 (2.0)	3,162 (100.0)

## b) 経営耕地規模別農家数

単位：戸 (%)

	自給の農家		販 売 農 家							合計
	0.1～0.3	～0.3	0.3～0.5	0.5～1.0	1.0～1.5	1.5～2.0	2.0～2.5	2.5ha～		
古黒部地区	3 (3.2)	0 (0)	7 (7.4)	25 (26.3)	31 (32.6)	16 (17.2)	10 (10.5)	3 (3.2)	95 (100.0)	
入 善 町	252 (8.0)	2 (0.1)	298 (9.4)	829 (26.2)	736 (23.3)	552 (17.5)	287 (9.1)	206 (6.6)	3,162 (100.0)	

## c) 農業従事日数別労働力

単位：人 (%)

	～29		30～59		60～99		100～149		150日～		合計	
	全体	男	全体	男	全体	男	全体	男	全体	男	全体	男
	古黒部地区	96 (34.0)	40 (30.0)	64 (22.7)	30 (22.7)	93 (33.0)	52 (39.4)	16 (5.6)	5 (3.8)	15 (5.3)	5 (3.8)	282 (100.0)
入 善 町	4,407 (46.9)	2,209 (46.8)	2,107 (22.5)	1,044 (22.1)	1,660 (17.7)	872 (18.4)	655 (7.0)	314 (6.6)	553 (5.9)	279 (5.9)	9,382 (100.0)	4,718 (100.0)

1990年世界農林業センサスにより作成

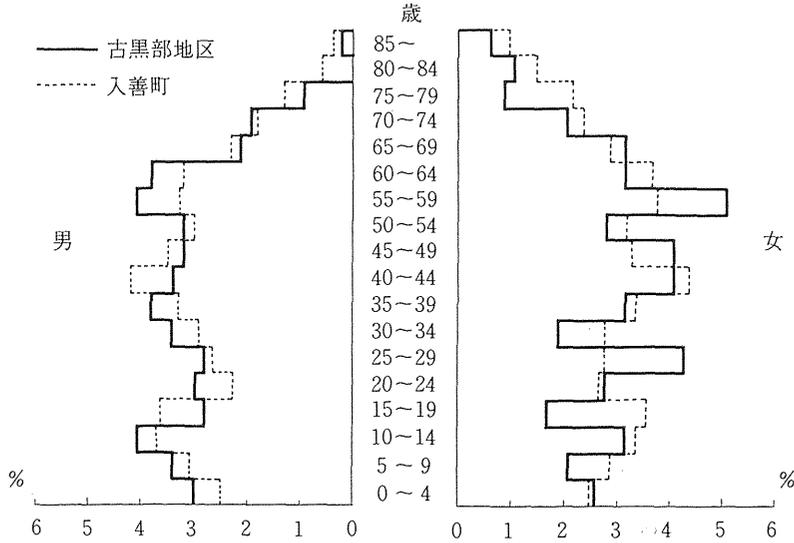
家も、多い販売額の農家も少なく、中程度の階層に集中している。同様の傾向は、経営規模についてもみられ、1.0～1.5haの階層とその前後に集中している。さらに、農業従事日数をみると町全体と比較して60日未満の農業従事者の割合も、100日以上 of 農業従事者の割合も少ない。すなわち、古黒部地区では農業にほどほどにたずさわっていることになる。経営内容を見ると、95戸の農家のうち自給農家が2戸であり、残りのうちの1戸が稲と麦の複合経営、1戸が稲と野菜・球根の複合経営で、残りの90戸は稲の単一経営であった。

以上のことから、古黒部地区の農家は兼業のかたわら、稲作を続けていることが理解できる。そして販売額も経営規模もかなりの水準を維持している。農業の基本的な姿勢としては、なるべく省力化をめざし、粗放的な経営や土地利用を試みているが、農業的土地基盤の脆弱さにより、相対的に多くの労働力が必要である。そのことが、他の地域より多い労働日数となっている。他の地域では30a区画の圃場が一般化し、農道も整備され、水管理も容易になったため、農作業の委託先を探すのは比較的容易である。したがってどの集落にも受託により大規模な稲作経営を行う農家が数戸みられるようになってきているが、古黒部地区ではそれが困難である。従って、1haほどの水田所有農家は、いずれもトラクターとコンバイン、育苗機、田植機、動力散布機、乾燥機、糞摺機を個人で装備している。そして労力的に無理をして農業を継続するか、作付けを放棄するかの二者選択をせまられる状況になっている。そうはいても、自分が所有する水田に接する末端用水路と畔道を管理する義務が伝統的にあり、それを怠ると用水の流れを阻害したり、通行ができなくなるおそれがあり、また、作付け放棄しても、定期的除草をしないと害虫が発生し、他の農民にめいわくがかかってしまうことから、現時点では何らかの形で稲作を続ける場合が多い。しかし、農村の人々の意識も急速に変化しており、今後作付け放棄地が増加すると予想する住民も多い。

#### IV-2 人口動態と就業構造

1964年の入善町総合世帯実態調査表によると、古黒部地区の世帯数と人口はそれぞれ108と496であった。世帯数は1970年に106となり減少したが、その後やや増加し1992年の住民基本台帳では115を数えている。人口は1975年に448まで減少したが、その後増加し1992年には485を数えるようになった。一般に人口減少が問題となる農村地域にあって、全体としては世帯数も人口もここ30年ほど安定しているといえよう。

さらに人口の年齢構成を、1990年の国勢調査の結果から人口ピラミッドを作成して検討すると（第6図）、全体的にはツリガネ型で人口が停滞あるいは安定状態であることがわかる。男性では50歳代後半から60歳代前半までと、30歳代から40歳代前半、10歳代前半が相対的に多く、女性の場合は年齢階層によって違いが大きい。一般に60歳代後半からの数が男性と比較してはるかに多いことや、50歳代後半と40歳代、20歳代後半、10歳代前半が相対的に多いという傾向がみられる。現在の古黒部地区を支えているのは、1990年当時30歳代から40歳代前半までの男性と、40歳代と20歳代後半の女性であり、これらは50歳代から60歳代前半までの男性と女性の支持を受けている。そして、10歳代の児童・生徒を育成している。すでにのべたように、青年団の形骸化、古青会の弱体化は、この人口ピラミッ



第6図 入善町古黒部地区の人口ピラミッド(1990年)  
 国勢調査報告より作成

第5表 入善町古黒部地区の就業別世帯数  
 (1993年8月)

就業の組合せ	世帯数
農業	3
農業+日雇・パート	9
農業+自営	6
農業+自営+会社	4
農業+会社	34
農業+会社+日雇・パート	20
農業+公務	2
農業+公務+日雇・パート	4
農業+会社+公務	7
農業+会社+公務+日雇・パート	1
小計	90
自営	3
会社	11
会社+自営・パート	2
公務	2
公務+自営・パート	1
公務+会社	3
無職	2
小計	24
合計	113

聞き取り調査により作成

ドからも容易に理解でき、しだいに活動の中心が黒碗会などのやや年齢の高い世代へ移りつつあることがうなづけるが、若いリーダーの育成と中心世代の新陳代謝が古黒部地区の将来の課題であろう。

1990年の国勢調査によって古黒部地区の就業状況を見ると、274人の総就業者のうち製造業従事者が最も多く95人で、これに建設業従事者の57人、農業従事者の38人、サービス業従事者の35人、そして卸・小売業の24人が続いている。農業従事者は全体の13.8%を占めるにすぎず、しかもそのうちの60%が女性である。入善町全体と比較すると、建設業従事者の割合が特に多く、さらに農業従事者の割合もやや多い。反面、卸・小売業従事者やサービス業従事者の割合が相対的に少なく、製造業従事者の割合は、平均的である。こうしてみると、黒部川扇状地の一般的な農村と大きな違いはない。建設業の割合が多いのは、地元には2つの建設会社があることとも関係している。

1993年8月の聞き取りにより、古黒部地区の就業別世帯数を調べた(第5表)。これによると、113世帯のうち農業を営んでいるものは90あり、農業を行って

ないものが24あった。この24世帯のうち9つは、農地を親類などに全面的に委託しているものである。農業と会社勤務や公務（団体職員を含む）を組み合わせるものが61を数え、農家全体の70%近くを占める。非農家も会社勤務や公務などに従事するものが多い。

古黒部地区は入善市街地と朝日市街地の間にあり、国道8号線の沿線にあるなど、黒部川扇状地でも都市的就業機会に恵まれており、農家も非農家も安定した就業先がある。また、北陸自動車道路の朝日インターチェンジからわずかに2.5kmの距離にあるところから周辺には工場や事業所の立地が多くみられる。1993年7月に操業を開始した入善キタノ製作所もその1つである（写真8）。この会社は富山市のキタノ製作所の子会社で、オーディオカセットやゲームソフトカートリッジ、LCD（液晶）

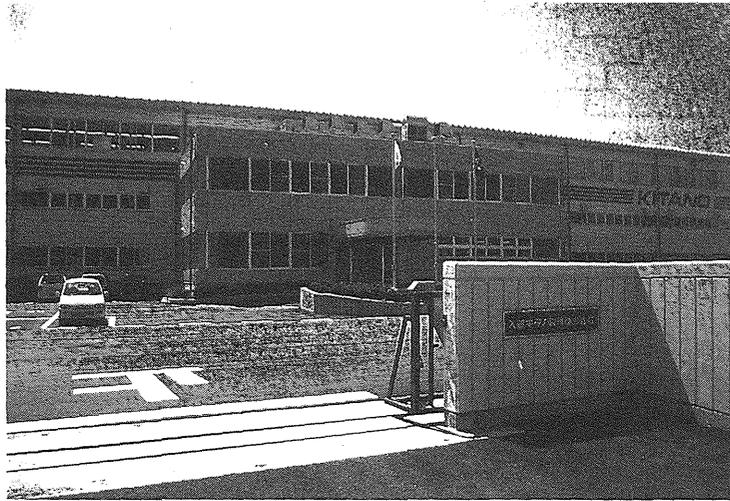


写真8 入善キタノ製作所（1993年8月）

リモコンを生産している。古黒部地区の国道8号線沿いに立地し、敷地面積は10,800m<sup>2</sup>で建物面積は5,200m<sup>2</sup>である。1993年8月の聞き取りによると、従業員数は115人であり、古黒部地区からも5人が通勤している。その他入善町から47人、朝日町から34人と、比較的近距离から従業員を集めている。

これまでみたように古黒部地区は、農外就業機会には恵まれており、地元で就職し農業を継続することが可能な経済的環境にある。

## V む す び

農村の持続性をさぐるために入善町古黒部地区の生活組織を検討した。この地区における様々な生活組織とそれを支えている人々の行動をみると、まさに持続的農村にふさわしい内容をもっている。農村が持続的に活力をもって存続しているのは、そこに多くの青壮年が定着しているからである。そのためには、現代的生活水準を維持するだけの経済的基盤が必要であり、それをこの地区の農業に求めるのは困難で、農外就業機会に恵まれていることが重要な意味をもっている。彼らは「家の跡継ぎは集落に残るべきものである」という伝統的な慣習にしたがって、学校教育を終えた後、地元で安定

した就業を得て、時には農業を手伝っている。また、すでに述べた脆弱な土地基盤の状況では、誰かが家に戻り、農地を管理する必要がある、むしろこのような整備の遅れた農地の存在こそが、一定の人間を地元にとどまらせる1つの大きな要因になっているのではないかと考えられる。そして、せっかくそこに居住しているならば、ともに居住していることの意義を高めようと、さまざまな活動が試みられている。

当然のことながらこの地区の大きな課題は、現在のままの農地を将来ともに維持するのは困難であるので、いかにこの状況を改善するかということである。農地の一部を工業用地として売却し、残りを大型の圃場に整備しようという案がある一方、現在の農地の状況こそが彼らをこの土地に定着させている絆であり、郷土意識であり、足枷であるという意見もある。確かに周辺の農村では、圃場整備によって一変した農村景観の中から昔のふるさとの面影をみつけたすのははなはだ困難なことに違いない。一昔前のような農村景観が残っており、不便だからこそ、多くの住民が生まれ故郷に引きつけられるのではないかと考えられる。経済的合理性のみを追求する時代が去った今、人間生活にとって何が重要なのかを考えさせてくれる農村がこの古黒部地区であり、ここで実践されている様々なコミュニティ活動の中に、そのヒントがあるように思える。

この報告作成のための現地調査と資料収集にあたっては、入善町の総務課や税務課、農政課の皆様、黒部川扇状地研究所の吉島敬重所長と盛田親義事務局長、入善キタノ製作所、洗足学園魚津短期大学の奥田淳爾教授、古黒部地区の谷 一夫・草 栄一・谷 健蔵の前区長、広川哲義・栗虫清視・草 照久の区長、谷 昌嗣前公民館長と谷 繁義公民館長、広川幸英公民館主事、山崎久直福寿会会長、谷 儀一古黒部土地改良区理事長、広川房子婦人会会長、赤川雅和体育協会会長、谷 久重・広川トシ子・広川るみ子・草 伊佐松・赤川慶一の各氏など多数の皆様にお世話になったことを記して、厚くお礼申しあげる。なお、この報告の作成にあたって平成4年度文部省科学研究費補助金重点領域研究(2)「中部日本の扇状地における農業的土地利用の時間的・空間的変動に関する地理学的研究」(代表者 田林 明、課題番号04209202)と平成5年度文部省科学研究費一般研究C「農業地域形成における都市-農村の水平的結合に関する地域的研究」(代表者 菊地俊夫、課題番号05680134)による研究費の一部を使用した。

#### 注および参考文献

- 1) 志村英二・祓川信弘訳(1991):『持続的農業生産-国際農業に関する研究戦略-』農林水産省熱帯農業研究センター, 70p.
- 2) Ruckelshaus, W.D. (1989): Toward a sustainable world. *Scientific American*, September, 166~174.
- 3) Pierce, John. (1992): The policy agenda for sustainable agriculture. In, Bowler I.R., Bryant, C.R. and Nellis, M.D. eds, *Contemporary Rural Systems in Transition, Vol.1*, C・A・B International, 221~236.
- 4) 農林水産省農業環境研究所企画連絡環境研究チーム(1991):『人とみどり地球と』農業環境技術研究所, 21p.
- 5) 嘉田良平(1990):『環境保全と持続的農業』家の光協会, 262p.
- 6) Everitt, John and Annis, Robert (1992): The sustainability of Prairie rural communities. In, Bowler I.R., Bryant, C.R. and Nellis, M.D. eds, *Contemporary Rural Systems in Transition, Vol.2*, C・A・B International, 213~222.
- 7) 田林 明(1988):黒部川扇状地における農村のコミュニケーションと公民館. 筑波大学人文地理学研究, **12**, 87~72.
- 8) 田林 明(1993):入善町古黒部地区の生活組織. 黒部川扇状地, **18**, 121~133.
- 9) 下新川郡役所(1909):『下新川郡史稿 下巻』下新川郡役所, p.425.

- 10) 入善町史編さん委員会 (1988) : 『入善町史資料 編 2』入善町, p.39.
- 11) 入善町史編さん委員会 (1990) : 『入善町史通史 編』入善町, 110~111.
- 12) 広川幸晴 (1975) : 『古黒部村郷土史』自費出版, 4~5.
- 13) 奥田淳爾 (1993) : 黒部川と古黒部村. 黒部川扇状地, **18**, 106~112.
- 14) 1992年度の場合で男6,000円,女5,000円であった。
- 本来男の労働力のある家が出役しない場合は6,000円を,女性労働力しかない家の場合は5,000円を地区に支払うという意味である.男の労働力がある家で女が出役した場合は,1,000円の不足を支払うことになる.
- 15) 入善町史編さん委員会 (1990) : 前掲11), 669~667.
- 16) 広川幸晴 (1975) : 前掲12), p.35.

## Sustainability of a Rural Community on the Kurobe Alluvial Fan

Akira TABAYASHI

Since the 1960s agricultural production of advanced countries rapidly increased by the introduction of farm machinery, chemical fertilizers and pesticide, enlargement of farm size, capital intensification, specialization, and the development of agribusiness operations. However, the growth in productivity and income has been achieved at the expense of resource and environment. It took a new turn in the late 1980s when sustainable development of agriculture and the stability of rural communities became most often discussed in North America and Western Europe.

According to the study on rural communities in Canadian Prairie by Everitt and Annis (1992), sustainable rural communities have viable economic and social bases, good communication among community members, sufficient cultural and recreational activities, young and flexible leaders, and people willing to invest time, talent and money in the future of their communities. The objective of this paper is to exemplify a sustainable rural community in Japan referring to the Canadian case.

Furukurobe, the study area is located on the Kurobe alluvial fan in central Japan facing the Sea of Japan. It has 113 households with 469 inhabitants. Population of this community has been increasing slightly, and there are a good number of residents from thirty to forty years of age. Various organizations and community activities, including administrative, social, economic, religious, and recreational, keep active. This is mainly because younger generations still maintain a traditional custom, that is, one of the sons or daughters of the family returns to the community to take over their parents' farm and property. Since high standard of living cannot be maintained by farming one hectare paddy field, they have to engage in off-farm jobs near the village. Furukurobe has many employment opportunities because it is located along the national highway No.8 and is close to two local commercial centers. The successors do not have difficulties in finding jobs near the village.

While most paddy fields on the Kurobe alluvial fan were consolidated and improved in the 1970s, paddies in Furukurobe have kept unchanged since the land improvement was undertaken

before World War II. This has delayed the development rice farming. However, unimproved paddy conditions encourage younger people out of the community to return to their home to help their parents. Ironically, inefficient agricultural environment ties younger generations to this village, and they play important roles in making community active and viable.